

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：33805

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520195

研究課題名(和文) テクノロジーアートにおける言説とメディア - 死生観を反映した芸術表現 -

研究課題名(英文) Discourse and Media in Technology Art : The Artistic Expression that Reflects the View of Life and Death

研究代表者

北市 記子 (KITAICHI, NORIKO)

静岡産業大学・情報学部・准教授

研究者番号：90412296

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、メディアアートのパイオニアとしてわが国のアートシーンに偉大な功績を残してきた山口勝弘の「今」について言及する。

2010年以降、我々は山口から直接依頼を受けて彼の作品制作に密接に関わっており、その成果の一つとして2013年10月に展覧会「回遊する思考：山口勝弘展」を開催した。そこでは近年の代表作と共に、今回の展覧会に向けて新たに制作した最新作「ヴィトリーヌもどき」も発表された。

研究成果の概要(英文)：This study refers to the "present" of Katsuhiro Yamaguchi who has made a great contribution to the art scene in Japan as a pioneer of media art.

Since 2010, we have been closely associated with his art production as a result of a direct request from Yamaguchi himself and held the exhibition "Imaginary Thinking:Katsuhiro Yamaguchi" in October 2013 as one of the outcomes of this collaboration. His most recent work "Vitrine Mimesis" that has been specifically created for this exhibition was presented there, as well as representative works from recent years.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学(芸術学・芸術史・芸術一般)

キーワード：山口勝弘 実験工房 ヴィトリーヌ メディアアート

1. 研究開始当初の背景

我々の研究チームでは従来から、共同研究という形で最新のメディアアート作品を調査し、その表現傾向の理論的な分析等を行ってきた。特に2005年以降は、毎年9月にオーストリアのリンツ市で開催される世界最大規模のメディアアートの祭典「アルス・エレクトロニカ」での作品見学を中心とした調査研究を継続的に実施し、時代の移り変わりと共に変化する作品の表現傾向の詳細な分析を行いながら、「表現」と「テクノロジー」の関係性について考察を行ってきた。そして研究を進める中で、特に最近のメディアアート作品において、エンターテインメント的な要素の強い「装置的な作品」が増加していることに気付いた。こうした作品は、従来のアート作品と比較してより親しみやすく、一般の人々にも容易に理解し易いため、特に近年大きな注目を集めている。しかし一方で、そこには本来芸術表現に不可欠な、「思慮深さ」のようなものが欠ける傾向が見受けられる。

本研究を進めるに先立ち、我々はこうした状況に対して少なからず危機感を抱いていた。そこで、メディアアートなどテクノロジーを基盤とする芸術における「表現」と「テクノロジー」の関係性について、改めて問い直すことが必要であると考えようになった。

我々は2010年以降、メディアアートの偉大な先駆者として知られる山口勝弘から直接依頼を受ける形で彼の作品制作に密接に関わり、主に技術的な側面から様々なサポートを行ってきた。そこで、これら山口の近年の作品群を手掛かりに、彼の長年にわたるアーティスト活動を振り返りながら、上記の命題について深く掘り下げていくこととした。

2. 研究の目的

山口勝弘(1928～)は戦後まもなく造形作家としての活動を始め、わが国においてテクノロジーアートあるいはメディアアートと呼ばれる現代芸術の新しい領域を切り開いた先駆者である。彼の長年にわたるアーティストとしての活動履歴は、そのままわが国のメディアアートの歴史とリンクするものであることから、山口勝弘という一人のアーティストについての研究が、日本のメディアアートの歴史を俯瞰的に検証する試みとなり得るのではないかと考えた。

本研究は、メディアアートの各領域の細分化および技術の高度化によって乖離してしまいったアートとテクノロジーをいま一度結びつける試みでもある。その実践的なアプローチとして、山口がイメージする新しい作品構想を具現化するための様々な方策を検討していく。そこでは生と死にまつわる哲学的な思考を反映した表現手法を探求し、作品を通してメディアアートに普遍的な「芸術とテクノロジー」あるいは「言説とメディア」の関係性を改めて問い直すことを目的とする。

3. 研究の方法

方法の主軸は、山口の構想を具現化するための作品の実制作および、そのプロセスの詳細な記録となる。そもそも我々は研究開始以前から、山口の直接依頼により、作品制作の補助作業などを行ってきた。そのなかで互いに確固たる信頼関係を築きあげ、我々でこそ可能となる近視眼的な調査方法を確立していった。作品制作の有無に関わらず、山口が我々に指示する際の手段としては、急ぎでないものに関しては手紙や葉書、文面での確に指示しなくてはならない事柄についてはFAXで、そしていよいよ急を要する場合は電話を使い、自然にメディアの使い分けを行っていた。本研究では、このようなやり取りの全ての行程を記録することで、アーティストとしての山口の「今」をあぶり出していった。そしてこうしたプロセスから、山口の独自の感性から導き出される創造性を発見しようとしたのである。

一方、以前より継続的に行っている国内外のメディアアートの現状調査も重要な研究方法の一つである。特に毎年開催されるアルスエレクトロニカ(オーストリア)とメディア芸術祭(日本)はその傾向が俯瞰できる絶好の機会となっている。これによりメディアアートの現在の動向や問題点をあぶり出すと共に、「芸術とテクノロジー」の関係性を考察するに有益な手がかりとなる。

このように、近年のメディアアートの動向を調査し分析することと、山口のアーティストとしての姿勢をつぶさに調査記録してゆくこと、これらを互いに往来することで、「芸術とテクノロジー」あるいは「言説とメディア」の関係性を考察し、ある種の結論を導いていくことができるのではないかと考えた。

4. 研究成果

本研究の最も重要な成果は、研究期間最終年に開催した展覧会「回遊する思考：山口勝弘展」である。同展の実施に至る背景として、我々が作品制作に関わる共同作業を通して改めて発見した山口の創造性を、広く社会に発信し、これを共有することが責務であると考えたことが挙げられる。

山口の作品制作において我々は、特に技術的な側面から様々なサポートを行ってきた。そして彼の世界観や独自の思考のプロセスを間近で垣間見ることとなり、病に倒れてもなお旺盛な制作意欲を持ち続ける一人の老練なアーティストの、強固な信念を改めて再認識することができた。そこで、調査中に得た貴重な体験を社会に提示するには「現在の山口勝弘の展覧会」という形式が最も適していると考えるに至った。企画の立案後、実施段階で賛同した他大学の研究者2名(いづれも山口と師弟関係にある大学教員ら)を迎え入れ、4名で本展の実行委員会を発足した。展示場所として、山口がかつて教鞭を執った神戸芸術工科大学が開催に最も相応しいと

考え、同大学内のギャラリーセレンディップの協力を得て、2013年10月15日～19日の5日間に渡って展覧会を開催した。

(1) 展覧会の実施報告

出品作品の概要(表1)

近年の代表作と共に、本展覧会に向けて新たに制作した最新作《ヴィトリヌもどき》シリーズ(No.46-50)を発表した。本作品は絵画バージョンの作品(No.46-48)と動画バージョンの作品(No.49,50)の二種類に大別できるが、特に後者は新しいデバイスであるiPadを使用しており、近年の山口作品の中でその特異性が際立っている。また、映像上映方法の工夫として、網戸を素材とする透過型スクリーン(俗称:アミッドスクリーン)を採用したが、そこに映し出されるイメージの独特の浮遊感は、本展のタイトルである「回遊する思考」と見事にリンクしており、非常に効果的であった。

作品No.	作品名	材質、技法	サイズ 横×縦(mm)
1		カンバス、アクリル	490×565
2		カンバス、アクリル	323×262
3		カンバス、アクリル	323×262
4		紙、鉛筆	475×630
5		紙、水彩	262×323
6		紙、水彩	262×323
7		紙、水彩	370×445
8		紙、水彩	370×445
9		紙、水彩	490×565
10		紙、水彩	262×323
11		紙、水彩	262×323
12		紙、水彩	262×323
13		紙、水彩	262×323
14		紙、水彩	370×445
15		紙、水彩	370×445
16	「三陸レクイエム」シリーズ	紙、水彩	370×445
17		紙、水彩	370×445
18		カンバス、アクリル	490×565
19		紙、水彩	370×445
20		紙、水彩	370×445
21		紙、水彩	370×445
22		カンバス、アクリル	490×565
23		カンバス、アクリル	490×565
24		カンバス、アクリル	490×565
25		カンバス、アクリル	490×565
26		カンバス、アクリル	490×565
27		紙、水彩	370×445
28		紙、水彩	370×445
29		カンバス、アクリル	490×565
30		カンバス、アクリル	490×565
31		カンバス、アクリル	490×565
32		紙、水彩	262×323
33	「三陸レクイエム」映像	DVD	7分10秒
34	ベネチア映像	テープ DVD	
35	地球儀	山口所有の既製品	
36	「イカロス」映像	DVD	
37	イカロスシリーズより 縦1(白フレーム)	カンバス、アクリル	260×320
38	イカロスシリーズより 横1(同上)	カンバス、アクリル	320×260
39	イカロスシリーズより 横2(同上)	カンバス、アクリル	320×260
40	イカロスシリーズより 横3(青フレーム)	カンバス、アクリル	350×280
41	イカロスシリーズより 縦2(同上)	カンバス、アクリル	280×350
42	イカロスシリーズより 横4(同上)	カンバス、アクリル	350×280
43	日本伝説浦島太郎より 魚籠1	魚籠に着色	未測定
44	日本伝説浦島太郎より 魚籠2	魚籠に着色	未測定
45	日本伝説浦島太郎より	ワイヤー	未測定
46	「ヴィトリヌもどき1」カリブ海の海星のオーラ1	カンバス、アクリル、フレーム	未測定
47	「ヴィトリヌもどき2」カリブ海の海星のオーラ2	カンバス、アクリル、フレーム	未測定
48	「ヴィトリヌもどき3」月光のバルテノン	カンバス、アクリル、フレーム	未測定
49	「ヴィトリヌもどき4」絵巻1	動画/iPad、フレーム	未測定
50	「ヴィトリヌもどき5」絵巻2	動画/iPad、フレーム	未測定
51	ほか1	紙、水彩、鉛筆	未測定
52	ほか2(「ルクソールのネオン彫刻」)	紙、水彩、鉛筆	400×520

表1 出品作品リスト

展示会場の工夫

我々が山口と共同作業を進める中で、山口の作品制作の初期段階における創作のイメージを膨らませるスピードの速さや、スケールの大きなモチーフ選びが極めて独創的である事に気づいた。それは我々の想像を遥かに超えていたが、これこそが山口勝弘の創造的行為の根源であると考え、それを「回遊する思考」と呼び、展覧会名として用いることとした。その「回遊する」状態を空間設計においても考慮した展示を心掛けた。(図1)

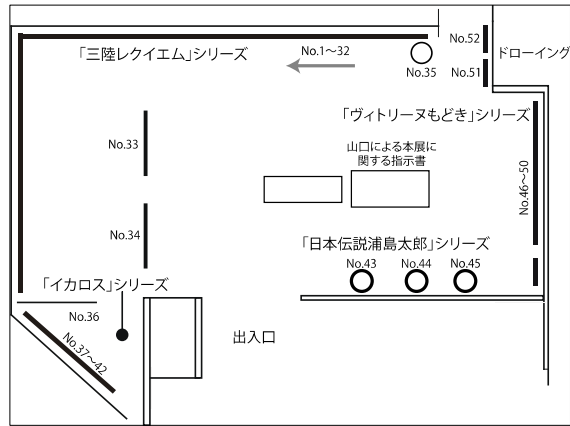


図1 会場内の作品展示図面 (表1と図1内の作品番号は対応)

(2) 山口の近作シリーズの明示

本展企画段階において、出品を予定する作品の選抜やそれらの所在等を確認する中で、山口の近作についての記録がまとめられていないことが判明した。山口は、生死の境をさまよった過酷な闘病生活を経て、2004年頃から再び作品の制作を開始しているが、膨大な作品点数や管理上の問題等で、作品そのものの現状を把握できずじまいと考えられる。本研究の調査により、これらの作品群を整理し、以下の5つのシリーズに系統的に分類することができた。

《テアトリーヌ》2004

「宇宙」や「顔」をテーマとするインターネットメディア作品の構想。「顔曼荼羅」など、病気療養後に描き始めた同様のテーマを持つ30点の絵画も、本構想の一部に組み込まれている。

《モバイルプラネタリウム》2007

「夢は宇宙を駆けめぐる」というサブタイトルが付けられたインスタレーション作品。宇宙飛行士の等身大のフィギュアと9点の絵画、および小さなドーム状の装置に映し出された映像によって構成されている。

《イカロス》2009

イカロスの飛行をテーマとした、25点におよぶドロ잉および絵画作品のシリーズ。山口自身の考案による独特の筆勢が特徴的である。

《浦島太郎》2010

「亀」や「魚籠」など、浦島伝説を想起させる複数のオブジェと、ワイヤー状の蛍光色の発光体および数点の絵画により空間構成されたインスタレーション作品。

《三陸レクイエム》2011

東日本大震災の惨劇を目の当たりにした山口が、巨大津波で命を奪われた犠牲者への鎮魂の思いを込めて制作した、30点を超える絵画作品のシリーズ。

(3)考察

本展の特筆すべき点は新作《ヴィトリーヌもどき》の発表であり、我々にとってその経緯をつぶさに記録した事は、非常に有益な体験となった。ここで本研究の集大成として、山口の作品創造のプロセスを解明しながら、かつての代表作《ヴィトリーヌ》と新作《ヴィトリーヌもどき》の関係について述べ、現在の山口作品の特徴について考察をまとめる。

山口の創造的行為について

本研究における一連のアプローチを通して、我々は山口の思考と創造の過程を綿密に記録することができた。その中で最も我々を驚かせた点は、著しく変化してゆく山口の思考とそのスピードである。彼の溢れ出るイメージは我々の想像を遥かに超えるスピードで二転三転し、その思考は常に新しいアイデアの方へと向かい続けていた。その為、我々を混乱させることは日常的であったが、こうした状況こそが現在の山口の特徴であると共に、彼の創造的行為の核心部分であると考え、これを我々は「回遊する思考」と呼んだのである。山口は新作構想中においてもこうした特質を遺憾なく発揮し、最終的なモチーフ案として、「デウスエクスマキナ」「鯨絵」など、様々な案が浮かんで消えた。

新作《ヴィトリーヌもどき》について

結局新作のモチーフを「鯨絵」に決めた山口であったが、それが具体的にどのように作品になるのかは定かではなかった。当初我々はそれまでの山口の作品傾向から、シンプルな絵画作品となることを想定していた。しかし今回山口が「描くこと」以上に重視した点は、新しい視覚効果、つまり自身の代表作としてアート史に残る《ヴィトリーヌ》的な視覚効果を、現代にリバイバルすることであった。

実は山口は2004年頃、ある時友人からシート状の特殊なレンズ(フレネルレンズ)を受け取った際に、このレンズが《ヴィトリーヌ》に似た、しかし明らかにそれとは異なる視覚効果を生じさせる事に気付いている。そして、その経験を温めながらイメージを膨らませていき、本展を機会として、この新しい《ヴィトリーヌ》を作品として具体化したのである。当初この新作に対する特定の呼び名

はなかったのだが、いつの頃からか山口はこれを《ヴィトリーヌもどき》と呼ぶようになった。

名作《ヴィトリーヌ》と新作《ヴィトリーヌもどき》は共に、表面に特殊な視覚効果をもたらす細工が施された奥行きのあるフレームと、それに内包されるイメージによって成立する作品形式となっている。一般的な《ヴィトリーヌ》と新作との差異は、以下にまとめることができる。(表2)

	(ヴィトリーヌ)	(ヴィトリーヌもどき)
フレーム	2枚のモールガラスを積層して構成	プラスチック製のフレネルレンズを短冊状に裁断し、アクリル板に貼り付け
内包されるイメージ	肉感的な要素を排除した幾何学的なイメージ	筆跡が残るプリミティブなイメージ
鑑賞方法	鑑賞者の自発的な動きでイメージが変化 = インタラクティブ性	【絵画バージョン】 【ヴィトリーヌ】と同様の仕掛け 【動画バージョン】 映像自体の動きと【ヴィトリーヌ】的なイメージ変化が融合

表2 《ヴィトリーヌ》と《ヴィトリーヌもどき》の比較

山口の現在の作風について

過去には肉感的な要素を排除しテクノロジーと寄り添いながら表現活動を行ってきた山口であるが、病氣療養後に最初に始めた表現は絵画であった。そこで描かれているのは、半身不随となりながらも辛うじて動く片手を使って絵を描く山口の、触感にあふれた手の痕跡としてのイメージである。近年の作品の特徴をまとめるとするならば、作品のモチーフがよりプリミティブなものになり、表現の原点ともいえる「描く」行為へと辿り着き、情念的な作風へと転じた点が挙げられる。

本研究の国内外における位置づけ

「回遊する思考：山口勝弘展」は、メディアアートの先駆者・山口勝弘の不屈の精神を詳らかに展覽した貴重な機会であったと言える。本展は著名なメディアアーティストの個展という体裁を取りながらも、最先端のテクノロジーを用いたメディアアート作品を紹介するものではなく、一人のアーティストが今もなお「表現する」その姿と、そこから垣間見える「芸術とテクノロジー」についての問いかけを、作品と関連資料の展示を通して鑑賞者に投げかけようとするものであった。

本研究は、我々と山口との日常的な小さなやり取りを発端として始まったものである。しかし改めて我が国のアートシーンを見渡してみると、本展に前後して、関連する展覧会が数多く開催されている事に気付く。中でも、1950年代にいち早くインターメディア的な試みを実践し、山口もかつてメンバーの一人として活動していた「実験工房」が今再び大きな注目を集めており、2013年には「実験工房展 戦後芸術を切り拓く」と題された大

規模な巡回展が開催された。こうした現象の背景には、当時のメンバーの高齢化という現実が関係していると考えられるが、本研究もそうした社会的な要請に応えるという意味において、非常に重要な責務を担っているのである。

また近年、海外においても同様の「実験工房ブーム」が巻き起こっている。ここ数年の間にも、ロンドン(2009年)、パリ(2011年)、ケルン(2012年)で、それぞれ「実験工房」を冠した展覧会が開催されており、国際的にもその評価が高まっているのである。そして昨夏(2013年)には、ロンドンで山口の個展「Katsuhiko Yamaguchi Imaginarium」も開催された。同展はギャラリーの企画展として実施されたもので、1950年代から60年代の作品を中心に、ドローイング、立体オブジェ、絵画など多様な作品が紹介された。そしてこれらの作品群と共に、我々が制作に携わった近作《三陸レクイエム》の映像作品も展示されていた。美術評論家のヤシャ・ライハート氏は、同展のパンフレットに寄稿した論文で、この《三陸レクイエム》について、最も「感動的」な作品であると述べている。

まとめ

本研究は、現在のメディアアート関連研究に則しつつも新規性があり、社会的に意義のあるものであったと考えている。今回我々が開催した「回遊する思考：山口勝弘展」に触発される形で、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団の主催により山口の新たな作品展も企画されており(2014年10月、横浜市民ギャラリーあざみ野)、その波及効果も窺える。既に同財団から本研究チームへの協力要請も受けており、身体の不自由な山口に代わって実務的な部分での様々な調整を行っていく予定である。

今後も本研究で得た知見をさらに発展・深化させながら、他の研究者との連携を密にし、メディアアーティスト山口勝弘とその作品について、美学的な観点から詳細な分析を行っていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

北市 記子、社会的アクティビティとしてのメディアアート関連プロジェクト、静岡産業大学情報学部研究紀要、査読有、第15号、2013、pp.31-46

〔学会発表〕(計3件)

北市 記子、八尾 里絵子、メディアアートの先駆者・山口勝弘の近作に見る批判的思考、環境芸術学会第13回大会、2012年11月、東海大学

八尾 里絵子、「回遊する思考：山口勝弘展」からみる創造的行為について、日本映像学会関西支部第72回研究会、2014年5月、神戸芸術工科大学

北市 記子、イメージの桃源郷-山口勝弘とナムジュン・パイクの晩年における創造的行為、日本映像学会第40回全国大会、2014年6月、沖縄県立芸術大学

〔図書〕(計1件)

エイドリエン・ガーデン、川又 淳、北市 記子 他、羽衣出版、まなびのとびら、2013年3月、pp.48-62

〔その他〕

展覧会の開催「回遊する思考：山口勝弘展」、2013年10月、神戸芸術工科大学ギャラリーセレンディップ

ホームページ「山口勝弘展」、2013年7月より運用開始

<http://imaginarythinking.tumblr.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北市 記子 (KITAICHI, Noriko)
静岡産業大学・情報学部・准教授
研究者番号：90412296

(2) 研究分担者

八尾 里絵子 (YAO, Rieko)
甲南女子大学・文学部・准教授
研究者番号：10285413